横光利一「家族会議」における「資本」という「災厄」

位田将司

一、はじめに

横光利一は「家族会議」（『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』一九三五・八・九～一二・三一）において、投機家たちの「市場」における株の激しい取引を描いている。[1]その激しい仲買人たちのやり取りを、横光は「戦争」や「余震」、「震災」の比喩で表現するのである。例えば、物語の舞台である大阪と東京の証券市場での混乱を、「欧洲大戦」の「余震」として表現したり、東京の株の仲買店が取引で損失を出している状況を、「東京の仲買店はね、震災で、どこもやられてるんだよ」という形で表現していることからもわかる。それはあたかも、仲買人が争奪している「資本」それ自体が、「震災」や「戦争」といった、災害そのものとして描かれているかのようである。

横光が「震災」と「戦争」とを結び付けて考えていることは、「家族会議」を発表した後の東京帝国大学での講演（速記原稿）「転換期の文学」（『定本横光利一全集　第十五巻』所収、一九三九・六・二一）にも表れている。その講演で横光は、「尤も地震は自然のもので、戦争は人為的なものであるとはいへ、あれも一種の自然かも知れないのである」と、「地震」と「戦争」を結び付けて考えようとしている。

しかし、そのような「地震」や「戦争」は、横光にとって否定的な意味のみを持つわけではない。関東大震災直後、横光によって書かれた「震災」（『文芸春秋』一九二三・一一）でも、「此の災厄に逢つた人人に災難だと思つてあきらめるが良いと云ふのは陳腐である。彼らは心に受けた恐怖に対して報酬を待つてゐる」といい、「彼らは彼ら自身の恐怖を物語るとき、追想と共に生涯誇らかになるであらう」という形で、「地震」という「災厄」から「報酬」を見出している。

また「解説に代へて（一）」（『三代名作全集――横光利一集』所収、河出書房、一九四一・一〇）でも、「大正十二年の大震災が私に襲つて来た。そして、私の信じた美に対する信仰は、この不幸のため忽ちにして破壊された」というように、「不幸」として語られは

するが、「ラヂオ」や「飛行機」といった新しい科学技術が、「震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物」であり、「焼野原にかかる近代科学の先端が陸続と形となつて顕れた青年期の人間の感覚は、何らかの意味で変らざるを得ない」と、「震災」は「人間の感覚」を変化させる積極的な側面としても捉えられているのだ。

本論では、以上のような横光の「地震」や「戦争」に対する問題意識を踏まえながら、株を始めとする「資本」が、「戦争」や「震災」の比喩で表現される「家族会議」の表現の構造を分析したい。さらに、横光が株の取引と並行する形で恋愛の駆け引きを描こうとした問題も分析するつもりである。横光が描く恋愛には、「資本」という「災厄」への応接の問題が存在していると考えられるからである。

二、「家族会議」の「図式」と認識論の「図式」

柿本赤人という名で書かれた「新聞小説を評す」(『新潮』一九三五・一二)という同時代評では、「家族会議」が「主題がなく、筋がなく何回読みつづけても発展がなく、要するに幾人かの人物が登場して、結婚するとか、しないとか、たつたそれだけのことで、ゴタゴタしてゐる中に、八十回も過ぎてしまつたのだ」という形で、否定的な評価が下されている。この「家族会議」をめぐる同時代の評価は、研究史でも共通の認識として受け継がれるのである。

例えば保昌正夫は「善玉、悪玉でこそないが、消極、積極をもってそれにふり替えたふうの対立設定もどこか純文学の大衆化を思わせる」と、登場人物の単純な二項対立性を指摘する。[2] つまり柿本が「結婚するとか、しないとか」という対立の中に、見るべき「主題」や「筋」を見出せないとしたように、保昌も「対立設定」を肯定的には評価しないのである。

この保昌の評価を引き継ぐ形で樫原修は、「こういう二項対立でしか考えられていなかったとしたら、長編が一種の図式性を帯びるのは当然」だとし、「大阪と東京という単純な二項対立の「図式」が「家族会議」のすみずみにまでいきわたっている」と、「対立設定」や「二項対立」を「図式性」として批判する。[3] このような「図式」こそが「家族会議」のテクストを単純化してしまっている。柿本の同時代評に繋がる形で、研究史においても「家族会議」は、そのテクストの「図式性」によって否定的に評価されてしまうのだ。

しかし、このような「図式」に対する積極的な評価が現れる。松村良は、この「図式性」が「両義性や対応関係を無数に含んだ動態的構造」として「家族会議」には内在しており、「対立する図式の差異が統一化へと向かう、そのプロセスが物語の原動力」になると主張し、「図式」の積極的な評価の端緒を開くこととなった。[4] また掛野剛史は松村を参照しながら、横光の自筆訂正本での改稿過程を検証することで、「図式に亀裂を入れ、相対化する可能性を孕んだ〈近江〉という空間」が、テクストに書き込まれていることを指摘するのである。[5] 掛野によれば、横光は「〈大阪／東京〉」という「図式」を用いつつも、その「図式」を「相対化」

するモティーフを導入し、そこに「亀裂」を生じさせることで、「家族会議」の物語を進展させていくというのだ。

松村は「図式の差異が統一へと向かう」所に「家族会議」の「動態的構造」を見出したが、反対に掛野は、「図式」に「亀裂」という差異を与える「相対化の可能性」に、松村のいう「動態的構造」を見出していることになるだろう。互いが反対からのアプローチではあるが、松村も掛野も「図式」を否定的に見るのではなく、むしろその「図式」にこそ、「家族会議」のテクストを積極的に評価する契機を見ようとするのである。

つまり肯定的か否定的かに拘わらず、「図式」こそが「家族会議」の評価を規定してきたといえるだろう。ただ、この「図式」は「家族会議」のテクストに限定して考察されるものではなく、横光の文学理論として、さらに広い射程と重要性を持っているのである。それは、横光が「新感覚派」と呼ばれた時代に依拠した、イマヌエル・カントの認識論の図式性から考えるとわかりやすい。

『文芸時代』（一九二四～二七）に拠って「新感覚派」として活動した横光は、「新感覚論――感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説――」（初出「感覚活動――感覚活動と感覚的作物に対する非難への逆説――」、『文芸時代』一九二五・二）（以下「新感覚論」）によって、自らの文学を本格的に理論化した。「新感覚論」には、「感性」や「悟性」、「物自体」というイマヌエル・カントの哲学用語が使用されているため、カントの認識論の影響が従来指摘されている。[6] そのカントの影響を、横光は「覚書　一」（初出「覚書」、『文芸』一九三四・四）の中で次のようにいう。

> 私は新感覚派時代に感性と知性との分類に閉口して、前後の考へもなくカントに首を突き込んでみたこともあつたが、カントの感性と知性との分類のごときものにしても、その間に感覚や悟性や理性が介在してゐるばかりではなく、そこに統覚があつて知性となり、さらに図式にまで発展して知性の充実の企てになつてゐる。

横光は「新感覚派時代」におけるカントの認識論の影響を回想しているのだが、そこに「図式」という言葉が登場している。では、「図式」とは何かというと、それは人間の主観性の構造なのである。カントは「悟性」という思惟の認識能力と、「感性」という感覚する認識能力が、主観性において共存していると主張する。思惟と感覚という対立する認識能力が、なぜ主観性の内では綜合されて存在しているのか。『純粋理性批判』とは、その主観性の構造を分析し、解明することにあった。

例えば、「判断の先験的理説（或は原則の分論論）」の「第一章　純粋粋性概念の図式性について」（『純粋理性批判』所収、天野貞祐訳、岩波書店、一九二一・二）で、カントは主観性の構造を、「一面には知性的で他面には感性的でなければならぬ。此の如きものが先験的図式（transscendentales Schema）なのである」（傍点原文）という形で分析している。カントは人間の主観性を図式化された構造として把握したのである。

横光は、このカントの「図式」の理論を応用し、人間の主観に「新感覚」を引き起こす「図式」を理論的に創出しようとする。同様に、「唯物論的文学論について」（初出「文学的唯物論について」、

『創作月刊』一九二八・二）でも、「認識とは、感性と悟性の綜合的単一物に他ならぬ。悟性のみ新しくて新しき文学は生れないのだ。（感性と悟性の交流作用は、拙論「感覚活動」に於て詳論した）」というように、「悟性」と「感性」の「図式」に「新しき文学」の可能性を見出そうとしたのである。

それ故、横光にとって「新感覚派時代」以来、「図式」は単純に「二項対立性」や「対立設定」に還元されるものではなく、主観の「認識」を司るものであり、「新しき文学」を生み出すための「認識」の源泉でもあったのだ。しかも、「家族会議」の発表前年の「覚書　一」で、カントの「図式」に言及していることからも、横光にとって「図式」は「新感覚派時代」に限定されるモティーフではないと考えるべきだろう。同時代評から先行研究に至るまで、「家族会議」の中に肯定的か否定的かに拘わらず、「図式」が読まれるのはそのためである。横光は主観の「図式」から「新しき文学」の「認識」が産出されるように、「家族会議」も「図式」化したのだと考えられる。では、「家族会議」の「図式」は何を産出したのであろうか。

三、「価値」の「図式」

興味深いことに一九二〇年代から三〇年代においてカントの認識論における、主観性の「図式」を「価値」の理論と結びつける文学者が登場する。例えば平林初之輔は「社会科学方法論序説」（『太陽』一九二七・九）の中で、「文化は価値ありと認めたる目的に随つて行動する人間によつて直接生産されたものである」と「価値」が「人間によつて直接生産され」ると主張し、また「政治的価値と芸術的価値　マルクス主義文学理論の再吟味」（『新潮』一九二九・三）では、「文学」に「政治的価値」と「芸術的価値」が内在していることを指摘するのである。特に「文学」における「政治的価値」と「芸術的価値」をめぐる評論は、複数の文学者や哲学者を巻き込んで、「文学」の「価値」をめぐる論争を引き起こすわけだが、平林がなぜ「価値」にこだわるかというと、平林が新カント派の西南ドイツ学派の哲学者である、ハインリヒ・リッケルトの価値哲学を援用しているからである。平林が「社会科学方法論序説」で、「リツカート」（リッケルト）に何度も言及していることからもそれは明らかなのだ。

リッケルトはカントの認識論を「文化」と「価値」の理論に読み替えている。「歴史と芸術」（『文化科学と自然科学』所収、佐竹哲雄訳、大村書店、一九二二・四）でリッケルトは、「文化」と「価値」について次のように理論化する。

歴史的「普遍者」は、普遍的自然法則又は普遍的概念――普遍的概念に於ては、総ての個別的なものは、他の多くの任意な個別的なものゝ中の一の「場合」にすぎない――ではなくて文化価値である、文化価値は、一回的なもの個別的なものに於て、漸次発展する、即ち文化価値は現実性と結び付いてゐて、そのために現実性をして文化財たらしめるものであるそれであるから、私が個別的現実性を普遍的価値に関係せしめるならば、この現実在は、この価値関係に由つて、或普遍的な概念の類例とならずに、その個別性のまゝに意味ある

ものとなる。

リッケルトはここで、「個別的なもの」と「普遍的概念」が「価値関係」によって綜合されることで、「文化価値」や「文化財」として人間に認識されると述べる。本来、「個別的なもの」と「普遍的概念」は対立している。しかし「価値関係」の内では共存しているのだ。そしてそのような個別性と普遍性を共存させる「価値関係」こそ、リッケルトが「文化」と呼ぶものなのである。

先に見て来たように、カントは人間の主観性に「感性」と「悟性」という対立する認識能力を見出し、それは「図式」という構造において共存するとした。一方リッケルトは、カントのいう主観の構造を、個別性と普遍性を共存させる「価値関係」、即ち「文化」の構造としたのだ。ということはカントのいう主観性の構造とリッケルトのいう「文化」の構造は理論的には相同的なのである。こうしてリッケルトは、カントの認識論を援用することで、「文化」と「価値」の源泉が人間の主観性の構造にあることを基礎づけたのだ。

そして、カントの認識論を援用して文学理論を発表していた横光も、「文芸時評（四）」（初出「マルキシズム文学の展開」、『文芸春秋』一九二九・一）において、「文学作品の価値の決定」や「芸術の価値」、「私の芸術価値の決定方法」、「芸術作品は価値を有つ」、「作品価値の決定方法」というように、しきりに「価値」に言及している。

横光はこれらのカントの認識論と「価値」をめぐる評論を発表しながら、平林が引き起こした「芸術的価値論争」にも積極的に関わっているのである。[7] 横光がカントの認識論を基礎にして文学理論を構築したことにより、平林の新カント派の価値哲学を下敷きにした議論と相通じるようになるのは当然なのだ。横光はカントを通じて主観性の「図式」に注目しただけでなく、新カント派の価値哲学における、「価値」の「図式」にも注目するようになった。そして横光の中で、この「価値」の理論は経済学的な理論と接合し始めるのである。

四、「資本」の「図式」

板垣直子は「7　作家精神の積極的な追求――「紋章」、「家族会議」」（『現代小説論』所収、第一書房、一九三八・七）の中で、「「家族会議」は、作品として分類するとすれば恋愛ものに入ると思はれるが、従来の恋愛ものと違ふ一面は、或る生きた社会性が付加されてゐることである」と、その「社会性」を評価する。板垣は続けて、「かつて「新社会派」が経済機構の描写を標榜してできた上つたその種のものに比べるならば、素材を我がものにし切つてゐる」というのだが、板垣の評価する「社会性」とは、横光が「経済機構」を描いているということなのだ。もちろん「家族会議」が描写している「素材」とは株取引であり、大阪と東京の仲買人たちの動きである。

ただ、座談会「株式取引員ザックバラン「話」の会」（『話』一九三六・一二）において、実際の「株式取引員」による証言では、

「記者　日々新聞に出て居た横光氏の「家族会議」。株屋さんのことを書いてゐますが、あれはどうでせう。／**森川**　あれは、小説

は良く出来て居るが、挿絵が認識不足です。あれじゃ少く共日露戦争前の、取引店の状態だ。」という形で、挿絵に描かれた株取引が「日露戦争前」の株取引の風景として批判されている。また、「家族会議」の物語の設定である、大阪と東京の間に巻き起こる株取引における争いの存在自体も否定されているのだ。

あるいは岩上順一は、「十三　純粋小説と偶然性　「家族会議」について」（『横光利一』所収、三笠書房、一九四二・九）の中で、「横光利一は、「家族会議」に於て、このやうな金銭の魔力に翻弄される傀儡しか描き得なかつた」と、「家族会議」が経済についての小説であることは認めながらも、物語の登場人物たちを「傀儡」と見做す。これは先に示した、「家族会議」の「図式性」に対する批判に繋がっているのである。

しかし「家族会議」というテクストは、そのような「図式性」や「傀儡」に還元される構造ではない。むしろその「図式性」や「傀儡」に見えてしまう構造によって、「家族会議」は経済の構造を描いたと見るべきなのである。「家族会議」の「図式性」を経済学との関係で分析する必要があるのだ。

自由主義経済学者で、経済学史の研究者である河合栄治郎は、二・二六事件の翌日、おそらく全集版と考えられる「家族会議」を読み、「今日は一日横光利一の小説「家族会議」をよむ。流石に中のことは今の自分に思い合わされてよむ。之をよんでいる内に頭が冷静になって来る」という形で共感を持って日記に書き記している。[8]

河合は、この「家族会議」に触れた日記の約二年前、一九三四年の一二月三一日と考えられる日記に「一九三五年の計画」として、「〇　独乙新カント派の作物に親しむこと」と記しているのだ。そしてその記述の通り、河合はリッケルトを中心とした価値哲学と新カント派の書籍を日記に書きつけている。ここで重要なのは、河合が「家族会議」を読んだその時点で、価値哲学や新カント派の理論に親しんでいたということである。

河合に見られるような経済学からの価値哲学への関心は、新カント派の経済学者である左右田喜一郎にも顕著に見出すことができる。左右田は「経済哲学の問題」（『哲学研究』一九一六・八）において、「寧ろカントの用語例を襲ふて認識問題 Erkenntnisaufgabe なると考へざるべからざる如く経済学の内面より観察すれば、経済的文化価値は又此の意義に於ける一個の認識問題でなければならぬ」と主張し、経済学はカントのいう所の「認識問題」であり、新カント派の「文化価値」と理論的に相即するものだとする。

さらに興味深いのは、このカント及び価値哲学の認識論が、カール・マルクスの『資本論』とも理論的に重なり合うことなのだ。左右田に理論的影響を受け、また左右田を評価する経済学者のアルフレート・ゾーン＝レーテルは、「左右田喜一郎が、少なくとも出発点において、主観価値説という観念論的土台の上で試行運動しているのに、私の方は完全にマルクス主義的な基盤に立っている」と左右田に言及し、「私自身の問題設定は、マルクスの理論の背後に主観主義理論が潜んでいるその厳密な境界線を見つけ出すために、主観価値説の概念をマルクスの商品分析のカテゴリーへきわめて精確に適合させようとした」と、左右田の唱

える「主観価値説」をマルクス経済学に接合したというのである。[9]

なぜ新カント派に由来する左右田の「主観価値説」が、マルクス経済学と理論的に接合するのか。それを知るためには、『資本論』の「四、商品の物心崇拝的性質とその秘密」（『資本論　第一巻＊第一分冊（第一篇第一章）』所収、河上肇、宮川實訳、岩波文庫、一九二七・一〇）で、マルクスが「その机が一旦商品として出てくるや否や、それは感覚的であり同時に超感覚的である一つの物（ein sinnlich übersinnliches Ding）に転化する」と、「商品」を分析している箇所を見ればよいのだ。

マルクスは「商品」を「使用価値」と「交換価値」の二つが綜合された構造を持つとした。「商品」は人間の「感覚的」な次元で「使用」されるが、その感覚が及ばない人間の手を離れた「交換」の次元でも「価値」を持つ。「商品」とは「使用価値」という「感覚的」な「価値」と、「交換価値」という「超感覚的」な「価値」が共存した様態である。対立した概念が「図式」の内で共存するという構造は、まさしくカント及びリッケルトの認識論と同様の理論展開でもある。だからこそゾーン＝レーテルは、新カント派の「価値」もマルクスの分析する「商品」の「価値」も、主観性の「図式」に源泉があると気付くことができたのだ。

そして横光もまた、この「図式」を共有している。横光は「文字」にマルクスの「商品」と同じ構造を見出し、「作品」を「生産物」と捉えていた。[10] そして何よりも「家族会議」というテクストが、この「図式」を内在させているのである。例えば、「家族会議」の連載に先だって発表された、「大阪と東京」（『大阪朝日新聞』一九三四・一二・四）において、横光は次のように記す。

> 東京と大阪に流れてゐる主要な精神や物質の流動状態に気をつけないで、事を企てようと思ふのは間違ひであると思ふ。現在の東京の生活者の精神状態は、年々歳々猫の眼のやうに変つてゐるが、大阪の物質状態も、それに匹敵して変化してゐるやうに見受けられる。

この評論で横光は、「精神」と「物質」の対立した「図式」を提示し、東京を「精神」に、大阪を「物質」に割り当てて設定する。この「家族会議」にも見出される〈東京＝精神〉と〈大阪＝物質〉という対立する「図式」は、新カント派の「価値」やマルクスの「商品」の「価値」を生み出す構造と相同的なのである。これは「文字」が「商品」と相同的な形式を持つと主張した横光としては当然の発想なのだ。そして横光は「文字」だけでなく、テクストにも同様の「価値」と「商品」の構造を纏わせたのである。ならば「家族会議」とは、物語内容として株式相場を扱ったから経済的なものを描いたというだけではなく、まさしくテクストの構造において、〈東京＝精神〉と〈大阪＝物質〉の対立する「図式」を内在させたからこそ、経済に構造的に触れられたのだというべきではないか。

五、「資本」という「災厄」

前章で述べたように、横光は「家族会議」に〈東京＝精神〉と〈大阪＝物質〉という「図式」を設定する。それは「仁礼文七」

という大阪出身の、そして「重住高之」という東京出身の二人の株の仲買人との対立に重ね合わされる。

「相場といふものは万目注視の真中でやるんですよ。そんなときになれば、仁礼さんといふ人は、一個人の家のことなんか、考へちや、ゐられない人なんだよ。あの人は、物質の権化みたいな人で、物質の動く法則のままに、従ふ事を、天職だと考へてる人なんだ。それが、あの人の道徳だ。個人の没落などに、気を奪はれてちや、相場といふ文化の粋の頂上では、不道徳になるのだ。それは立派なことぢやないか。ところが、僕は、精神の法則に従ふ事を、道徳だと思つてゐる東京人です。(後略)」(99)

では「家族会議」における「相場」で扱われる株という「資本」はどのように描かれるのかを示さねばならない。

まず連載第一回目では「やがて、重住家の法事は始まる。重住高之は、父の法事に大阪から上京してくる、仁礼泰子を待つてゐる」というように、死を想起させる場面から始まる。その死は「重住高之」の父が大阪の株の仲買人、「仁礼文七」との株取引に敗れたことが原因だとされる。

そのため「高之」は父の死を「文七」との株取引と結び付けており、友人の「池島忍」に対しても、「君も泰子さんも、知らないだらうが、僕の親父が死んだのは、仁礼さんに株でやられて死んだのだよ。」(86)と告げている。また、この「高之」の父と「文七」の争いは、「大阪と東京との、戦争ぢやないの」(5)という形で、「戦争」に形容されるのである。

以上のように、「高之」にとって「文七」は父の仇であり、仲買人としては商売敵でもある。そして、今度は「高之」と「文七」が東京と大阪で株をめぐって争いを起こすのだ。「文七」は番頭の「京極練太郎」に株の買占めと大量の売りを命じて、東京の相場に混乱をもたらす。その混乱は、「高之」を「破滅」にまで追い詰めていくのだが、その様子を「練太郎」は地震の比喩で表わすのである。

「どうつて、それや、秘密で云へやしませんけれど、東京の兜町は、余震がいつてますのや。」／「何んですの、余震つて?」／まあ、そのときが来れば分りますよ。それより、あなた、早よ東京へ帰りなはれ。その方が良え。今夜どうです。」(65)

ここでは「余震」と表現されているが、それは「震災」という表現へとエスカレートしていく。

震災で兜町は、一時痛烈な打撃を蒙つた。しかし、あれは天災である。今日のは、仁礼文七一個人の力で、震災以上の打撃を与へたのである。それも昨日一昨日で崩した倍の下落を、今日一日で成したのだつた。(120)

この「震災以上の打撃」によって、「高之」の仲買店は「破産」する。「家族会議」は株取引をモティーフとしたテクストであるが、その株としての「資本」は、「死」や「戦争」、「余震」と「震災」といった「災厄」と結びついている。

だが、ここでは「戦争」や「震災」と横光との関係を確認しておく必要がある。例えば、横光の一九二三年の「関東大震災」の

直後に発表された評論「震災」（『文芸春秋』一九二三・一一）では次のように記される。

　此の災厄に逢つた人人に災難だと思つてあきらめるが良いと云ふのは陳腐である。彼らは心に受けた恐怖に対して報酬を待つてゐる。生涯を通じて此れが稀有な災厄であつたそれだけに、何物かに報酬を求めねばゐられないのだ。

横光は「震災」による「報酬」に言及し、地震を単なる否定的な事象とは見なしていないのがわかる。更に「家族会議」の連載から四年後、「関東大震災」より十五年以上経過した、東京帝国大学での講演速記録「転換期の文学」でも「あの大震災がなかつたら、そして死ぬ目に遭はなかつたら私は――今でも自信がある人物ぢやないけれども――自信が出なかつたと思ふ」といい、その上、「尤も地震は自然のもので、戦争は人為的なものであるとはいへ、あれも一種の自然かも知れないのである」というように、「震災」と「戦争」を結び付けて語るのだ。

横光は「震災」も「戦争」も単純には否定せず、「転換」や変化の契機として見ているのである。これは、「関東大震災」とほぼ同時に文壇に登場し、文学に新しい感覚をもたらそうとした横光に一貫した思考だといえよう。つまり、「家族会議」の中では、株取引の混乱は「死」や「戦争」、「震災」の比喩によって「災厄」と結び付けられるが、これは否定的な意味だけではなく、物語を新しく展開させ、変化させる契機としても見なされているということなのである。

六、「資本のチエーン」と結婚

では、その「災厄」による展開や変化とは何か。前掲「大阪と東京」で、横光は次のように述べる。

　さうなると、資本のチエーンが強力に太く合同を余儀なくせられて行くであらうから、東京人と同じく精神上の不安も色濃く増し、従つて一様に思想的な考へ方も太いチエーンをとるにちがひあるまい。しかし結局は動くだけは動いていくのだから、そんな遠い将来のことなど心配無用だといつてしまへばそれまでであるが、何といつても今のところは、東京と大阪との生活力の相違が、日本の国を動かしてゐるので、この二つの相違と歩みよりを見てゐなければ、これからの仕事は何事も出来ないのである。

「家族会議」が描く、東京と大阪間での経済的な争いは、この「資本のチエーン」の力を描いているのだ。これまで本論が論じてきた、東京と大阪の対立する「図式」とは、「資本のチエーン」の構造だったのである。この「チエーン」が駆動することで、「家族会議」の物語は展開していく。

　しかし、この凄惨な光景は、このときは、もう仁礼文七一人の力の勢では、なくなつて来てゐた。／そら、仁礼がやつてゐるぞと、風聞が立つと同時に、大阪の北浜から、陸続と兜町へ、有象無象の連中が、乗り込んで来たのである。彼らは、誰も彼もが、今だとばかりに、仁礼と一緒に売り出したのだ。／（中略）／勿論、高之も、万策尽きて、全然、破滅

してしまつた。(107)

ここで重要なのは「資本のチエーン」の力は、「文七」の意図を越えて、大勢の人間を巻き込むということだろう。「資本」の力は個人に還元されるものではなく、人を巻き込みながら、「高之」は「破滅」させられる。それはまさしく「災厄」なのである。しかし、「高之」は「破滅」するだけの人物として描かれるのではなく、彼自身を「破滅」させたはずの「資本のチエーン」に参入し、積極的にそれを支える人物としても描かれるのだ。それは、「高之」と「文七」の娘である「仁礼泰子」との結婚問題に読み取ることができる。

「家族会議」の冒頭から、父の死と共に「高之」の結婚問題が登場する。「先日春子から話された嫁の候補は、三人もあつたのだが、梶原といふのは、その中の一人で、矢張り高之と同業の仲買店であつた」(1)というように、三人の「嫁の候補」が存在するのだ。そのうちの二人である、「梶原清子」と「泰子」が「家族会議」では登場する。そして前述したように、仁礼家は重住家とは敵対しているのだが、「いづれは仁礼泰子と、結婚する羽目になるであらうと、親戚達は思つてゐた」(1)と、「高之」と「泰子」の結婚の可能性が描かれるのである。

もし「高之」と「泰子」の結婚が成立すれば、二人が「チエーン」となって東京と大阪の「資本」を繋げることとなるだろう。ただ、重住家の番頭の娘である「尾上春子」は、この結婚に反対し、「清子」と「高之」を結婚させようとする。さらに、「春子」と同じように、二人の結婚の障害となるのが、仁礼家の番頭「練太郎」なのだ。

練太郎の顔に現れた難色を見てとると、文七は、／「それや、これはなかなか面倒やが、わしなら、やつてみせるな。一つお前一人で、やつてみい。もしやれたら、その代りに、何んでもお前の欲しいもの、褒美にやるわ。」／かう文七から云はれると、もう練太郎は、後へは引けなかつた。殊に、何んでも欲しいものをやるとは、お前を泰子の婿にしてやると、云はれたのと同じであつた。(14)

このように「練太郎」は、株取引での成功の暁には、「泰子」との結婚を約束される。ということは「文七」もまた、仁礼家と重住家の間に「資本のチエーン」が結ばれることを拒否しているのである。

ところが奇妙にも、「高之」を「破滅」させたはずの「練太郎」は、反対の行動に出る。

「重住さん、しつこいやうですが僕はね、泰子さんを、あなたから貰ひたうて、こんなこと云ふのや、あらしませんから、さう思うて下さいよ。あなたは、まだ僕を誤解してなさるんですよ。」／「それは、十分よく僕には分つてゐます。ですが、何といふか、今あなたから御助力を得るといふことは、どうも僕としては、出来難いのです。」／「そんなら、あなたは、資金の出るとこ、失礼ですが、お考へあるんですか。」／「いや、ありません。」／「そんなら、そんな強情仰言らずに、僕の云ふままに、なされば良ろしやないか。」／(中略)／「豪さうなこと云はんと、僕に金借れば、良ろし

やろ。僕かてインテリや。あんたの死にかかってるの、見てられますか。うちの大将瞞したかて、僕、かめへん。あんた、良うなってくれる方が、僕には面白いんだ。」(116)

「練太郎」にとっては、「高之」と「泰子」との結婚の可能性を残す方が「面白い」のである。つまり株の仲買人である「練太郎」にとって、「資本のチェーン」は彼自身が存在するためには必要な構造なのだ。その構造が「家族会議」というテクストの物語の展開と変化にとっても不可欠だったのは、これまで見て来た通りである。

そして、「高之」と「泰子」の結婚に反対していた「春子」は、物語の後半で尾上家が破産させられた怨みから、「文七」を殺害してしまう。

「あなた、犯人知ってる。」／「いや、まだだ。捕ったの?」／「春子さんよ。」／(中略)／自動車の中で、高之は新聞を拡げてみた。社会面のトップに、大きく文七の殺害事件が出てゐて、春子については、神経衰弱の結果、精神に異状を来したものと書いてあつた。(135)

「春子」は「高之」と「清子」とを結び付けようとしたが、「文七」を殺害することで、結果的には「高之」と「泰子」との「結婚」の障害を排除してしまったことになる。「高之」と「泰子」の結婚の障害であったはずの、「練太郎」は「高之」を助けようとし、「春子」と「文七」の二人は殺人事件によって共に排除される。そして待ちうけるのは「高之」と「泰子」の結婚による、東京と大阪の「資本のチェーン」の連結である。

「泰子」は「高之」との結婚を意識し始める時、「高之」と「文七」を重ねあわせ始める。

泰子はちらりと高之の顔を見た。／その瞬間、どうしたものか、高之の微笑が、自分の父そっくりに見えるのであつた。どうしてこんなに似て来たのであらうかと、しげしげと見てゐるうちに、胸は高まり、苦しさにまた泰子は目を伏せた。(132)

このように「高之」と「泰子」が結婚すれば、今度は「高之」が強大な資本力を持った「文七」と同じ位置を占めるわけなのだ。「高之」のもとで、「資本のチェーン」は強大な力を持ち、「災厄」となる可能性を保持し続ける。しかし、その〈結婚＝チェーン〉を阻む障害はテクストからことごとく排除されてしまう。「家族会議」は、そのテクストの原動力となっている「災厄」をもたらす「資本のチェーン」を止めることはないのである。

七、「忍」と切断

しかし「資本のチェーン」に切断の可能性を与える存在が、「高之」と「泰子」の友人「池島忍」である。「忍」は当初から「高之」と「泰子」を結婚させようと行動している。物語内容を追う限りでは、「忍」は重住家と仁礼家を「チェーン」で繋ごうとしているかのように見える。だが、「家族会議」のテクストにおける「忍」の描かれ方を分析すると、実は逆説的な存在であることがわかるのだ。

「忍」の池島家は、重住家や仁礼家、尾上家、梶原家と違い、

仲買店ではなく「洋反問屋」を経営している。しかも「ここの家は他所の商売が会社のやうに進展する間にあつて、もの静に、過去の伝統を守り、狂はしい過渡期の変転を、切り抜けようとしてゐる」(36)というように株や「資本」からは距離をとった存在として描かれるのである。

ただ一方、「文七」との株取引での争いでは、「高之」に対して池島家が資金援助をしている。これに対して「高之」は、「胸中で揺れ動いたひそかな思ひ」という形ではあるが、「忍」に「自分が結婚を申し込んだら、何と云つて驚くであらう」(37)と想像する。また、株取引で争っているはずの「練太郎」からも、「忍さんつていふ人はをかしな人ですな。あれは、あなたのことで、ああ、やきもきしやはるところ見ると、あなたによつぽど好かれたいのでつせ」(48)と指摘され、「忍と結婚せよと云ふ意味かと、高之は顎を支へながら笑つた」と応じる。「忍」は、「高之」と「泰子」の結婚を積極的に推し進める存在でありながら、同時に「高之」に好意も持っているのである。

そして「忍」は、「文七」によって破産させられた「高之」の仲買店を買収し、「高之」を支配するに至るのだ。これに対し「泰子」は「忍」に脅威を感じ始める。「泰子」は「もし忍が高之を愛してゐるのだつたら」(128)と疑い、それを見透かしたように、「忍」は「ぢや、あたし、云ふわ。あのねほんとは、高之さんとこ、潰れたの。でも、あたしが、泰子さんに代つて、店の権利を買つといたから、また高之さん、つづけてるの。その代り、高之さんは、あたしの番頭よ。ふふふ。」(128)と「泰子」に代わって、「忍」こそが「高之」に支配を及ぼしていく。そして、東京・大阪間の電話のやり取りでも、「泰子」に対する「忍」の優位性が象徴的に描かれるのである。

忍はくるりと泰子の方を、向き返ると、／「早く、さア、」／と、受話器を泰子にさし出した。／泰子は思はず受話器の傍へ駈けよつて、／「あたし、泰子ですの。あのね。」／「……」／「あたし、泰子ですのよ。」／「……」／「高之さん。」／「……」／だんだん泰子の眉は曇つて来ると、泣き出さうな声で、また云つた。／「あたし、今日やつと、家を出てこゝまで来ましたのよ。」／「……」／すると、わッと泰子は泣き出した。けれども、まだ泰子は受話器を放さなかつた。忍は泰子を押しのけて替つて立つた。／「高之さん、あたし、忍よ。どうしたの。電話聞こえないの。あのね、今泰子さん、出なすつたのよ。ええ、さう。今夜、泰子さんと一緒に、東京へ行くかもしれないわ。あなた、一寸待つて、ちやうだい。」／忍はそこまで云ふと、急に泰子の耳へ、また受話器をあて換へた。／「高之さんですの、あたし、泰子ですの。」／「……」／「あのね、あたし。」／泰子はまた泣き出した。(128)

会話の三点リーダーは、電話機の不具合で、「高之」の声が「泰子」に届かないことを表現している。「忍」は、「泰子」と「高之」の電話をつなごうとし、「高之」に対して「泰子」と話すよう「命令」する。ところが「高之」の応答は「……」という無言の形で繋がらない。しかし「何んだか、ちつとも、分りませんね。」

／といふ高之らしい声が、しばらく忍の耳に這入つた、」(129) というように、「泰子」から「忍」に代わった途端、「高之」の声は届き始めるのだ。「忍」が仲介した電話での会話が、「高之」と「泰子」の間を「……」によって切断する。「チェーン」を繋げる役割を買って出たはずの「忍」こそ、「高之」と「泰子」の関係に切断としての「……」の描写を招き入れるのである。

その結果、「高之」は「実は、あなたとお約束したことは、とうてい実行出来さうもない」(132) として結婚の破棄を提案する。その上、「高之」は「忍」のために働くことを決心し、「泰子」に「練太郎」との結婚を勧めるまでになるのだ。

ただ今は、忍さんに使はれてゐるだけで、一つこの店を、よくして見ようといふ、希望だけより、なくなつてしまつたんです。そんな男が、あなたの必死の対照となる男ぢやないでせう。どうです、練太郎君とあなた、結婚しませんか。(133)

このように「忍」の存在は、「高之」と「泰子」の結婚を支援しているように見えながら、切断を与え続ける、逆説的なものとなっている。「忍」は二人の関係が悪くなっていることを知ると、「それぢや、また駄目ね。」／と忍は俯向いて、ほつと溜息」(135) をつくのであるが、この「溜息」が落胆のためなのか、それとも安堵のためなのかは決定できない形で表わされるのである。

ところが前述したように、「春子」による「文七」の殺害によって、「高之」と「泰子」との間の障害は一気に排除されてしまう。それは「忍」も例外ではない。「高之」は「一つ大手を振つて、泰子の財産を、ひつ掴まふと決心」(143) すると、突然「忍」は、「資本のチェーン」の「図式」から排除されてしまうのである。その排除が象徴的に現れるのが、またもや電話での会話なのだ。

「あたし、大阪の忍ですの。泰子さん、いらつしやいまして。一寸、すみませんが。」／しばらく間をおいてから、泰子が出て来た。／「あなた、泰子さん。あたし、忍よ。あのね、今、お手紙着いたところよ。ありがたう。良かつたわね。あたし、これから行くわ。病気もうすつかり、良ろしの。さう、それは、良かつたわ。あたしね、東京へ行こか、思うてたのやけれど、あなた、あたしに黙つて、行きなしたでしよ。それで、あたしも、つい遠慮してたの。高之さん、いらつしやるの。……」／「あなた、高之さん、あのね、あたし、これからお邪魔しようか思うてますの。良いかしら。さう、それは大きに。それから、一寸、あなた、結婚なさるんですつてね。お芽出度う。でも、随分、あなたも失礼よ。あたしに承諾なしに、そんなこと。勝手に定めたりして。番頭さん、もう直き、免職ですから、覚悟しててちやうだい。さよなら。」(144)

「高之」と「泰子」の電話を媒介した時とは違い、この会話にはその向こうにいる将来結婚する二人の会話は一切登場せず、「忍」は独り言のように喋りつづけ完結してしまう。あたかも「忍」は一人になってしまったかのようである。相対的に「資本のチェーン」から遠い存在だった「忍」は、結婚に切断を与える存在として描かれながら、しかし、その「チェーン」が繋がった瞬間、「忍」は「図式」から消えるのである。

八、おわりに

「家族会議」の「図式性」とは、まさに「価値」や「資本」の動きを表わす構図だった。その「資本」は「チェーン」として繋がり、個人の意識とは関係なく猛威をふるい「災厄」となる。「家族会議」の結婚の問題とは、「資本のチェーン」をさらに巨大化するか、あるいは断ち切るかという問題だったのである。結論としては、その「チェーン」は誰にも断ち切ることはできず、「災厄」は新たな〈高之―泰子〉の「図式」を描いたのだ。

ただ興味深いのは、単行本『家族会議』（創元選書、一九三八・一二）では、結末部が改稿されており、新聞連載の最終話の末尾で「俯伏せになつたまま、少しも動かなくなつた」姿の「忍」を、次のように描き直している。

それは長い間俯伏せになつたままだつた。しかし、再び顔を上げたときには、片頬に枕の皺のあとをつけてゐる忍は、よく寝た後のやうにのろりと寝台を降りて、また次の日の朝のやうに婆やに紅茶を頼んだ。そのときは、忍はまつたく、痴呆のやうに新鮮な顔で庭に植つた冬の薔薇の花を眺めてゐた。

横光は、一旦排除され「少しも動かなく」なった「忍」という存在を、再び活動させようと描き直し、切断の可能性を痕跡としてテクストに刻みこんだともいえるのである。

注（1）　本論の引用は、「家族会議」（『東京日日新聞』・『大阪毎日新聞』一九三五・八・九～一二・三一、全144回）に拠った。引用の後に付けられた括弧内の数字は連載回数を表わす。後に、新聞連載は『家族会議』（非凡閣版『横光利一全集』第一巻初収、一九三六・一）として単行本となり、さらに改稿された『家族会議』（創元選書、一九三八・一二）が出版された。

（2）　保昌正夫「「家族会議」まで」（『日本近代文学』一九六六・五）

（3）　樫原修「家族会議［横光利一］」（三好行雄編『日本の近代小説Ⅱ』所収、東京大学出版会、一九八六・七）

（4）　松村良「「家族会議」論――動態的構造としてのテクスト――」（『学習院大学人文科学論集』一九九二・九）

（5）　掛野剛史「「家族会議」論――図式とその相対化の可能性」（黒田大河ほか編『横光利一と関西文化圏』所収、松籟社、二〇〇八・一二）

（6）　玉村周「横光利一に於ける〝新感覚〟理論――「感覚活動」の解釈を中心として――」（『国語と国文学』一九七八・九）

（7）　この「文学」をめぐる「価値論争」は、位田将司「「文学」の「価値」――横光利一と「芸術的価値論争」――」（『語文』二〇一五・六）で詳しく論じている。

（8）　河合栄治郎「日記」（一九三六・二・二七）（『河合栄治郎全集第二十三巻』所収、社会思想社、一九六九・七）

（9）　アルフレート・ゾーン＝レーテル「日本語版への序文」（『精神労働と肉体労働』所収、寺田光雄、水田洋訳、合同出版、一九七五・五）

（10）　横光利一「文字について――形式とメカニズムについて――」（初出「形式とメカニズムについて」、『創作月刊』一九二九・三）

※『定本横光利一全集』からの引用に際し、旧漢字を適宜新漢字に改め、ルビは省略した。また引用文中の「／」は改行を表わす。なお本稿は早稲田大学国文学会二〇一六年度秋季大会（於　早稲田大学戸山キャンパス　二〇一六・一二・三）の研究発表に基づいている。会場をはじめ様々な機会で貴重なご意見を賜りました。皆様に感謝いたします。